



複眼的日本古代学研究の人材育成プログラム

<日本古代学教育・研究センター>明治大学大学院文学研究科史学専攻・日本文学専攻

ニュースレター 第19号

◆卷頭言

明治大学文学部長・総括責任者 石川日出志

震災と考古学・歴史学

2011年3月11日に発生した東日本大震災から5年が経過した。この大震災はさまざまな学術分野に対応を求め、それは考古学・歴史学も例外ではない。

歴史学界では、各地の博物館や個人宅に保管されている古文書などの文化財が、甚大な津波被害を受けており、それらをレスキューし、修理・修復する作業が続けられ、それはさらに今後何年也要する。

私が所属する日本考古学協会では、震災発生後ただちに東日本大震災対策特別委員会を組織して、各地の埋蔵文化財の被災状況の確認や、復興事業に伴う遺跡の発掘調査の実情調査や問題点の洗い出しを進めた。各地の遺跡の発掘調査では、文献記録のない過去の地震・津波被害が確認されて、地震史の基礎データとなり、災害対策への貢献ともなっている。例えば、仙台市沓形遺跡では約2100年前の弥生時代水田跡を津波砂が覆っており、今回とほぼ同規模の大津波があったことが確認された。

目次：

| | |
|----------------------------|---|
| 表紙 卷頭言 | 1 |
| フィールドワーク | 2 |
| 中国プログラム | 4 |
| 南西日本プログラム | 6 |
| 第6回明治大学・高麗大学校国際学術会議 | 6 |
| 国際学術研究会 | 8 |
| 「交響する古代VI－古代文化資源の国際化とその意義」 | 7 |
| 研究紹介 | 8 |
| 2015年度プログラム（秋学期）の軌跡 | 8 |

平野部の遺跡が形成される過程を考える際に、震災後は地殻変動に注目するなどの研究動向もある。

三陸の陸前高田市は、市街地が壊滅するなど、もっとも甚大な津波被害を受けた地である。現在、私たちは同市一帯で、科研費による共同研究<気仙地域の歴史・考古・民俗学的総合研究>（2014-16年度）を進めている。震災後に同市や、議員有志による歴史文化研究会からの要請もあって3分野の研究者が集まり、この界隈の歴史・文化を研究し、その成果を地域還元する取組みが始まった。その中でもっとも重要な活動として、気仙地域の魅力を市民の方々に語る報告会を催している。これまで2回行ったが、いずれも170名を越える多くの方々に集まっていた。参加された方々から、被災するまで地域の歴史・文化の面白さを意識し、実感することはなかったと語りかけられたとき、涙が流れた。震災にではない。私たちの方が歴史学・考古学・民俗学する大切さを教えてもらったからである。もちろん、これまで意識をしてきた。しかし、地域に根ざすことの意味をこれほど深く感じたことはなかったのである。



第1回報告会の様子（2015年2月15日）

◆フィールドワーク ◇中国プログラム

実施日：2015年10月31日（土）～11月4日（火）4泊5日

参加人数：学生1名、引率教員5名、合計6名

実施場所：中国・北京市（中国社会科学院）



<中国プログラム・フィールド調査日程概要>

- 10/31 羽田空港を出発、北京首都国際空港到着。北京市内見学
- 11/1 国家博物館と、天壇を見学
- 11/2～3 中国社会科学院にて学術交流
- 11/4 北京市内見学。北京首都国際空港を出発、羽田空港到着

◇参加記

2015年10月31日から11月4日の5日間にわたり、本年度の中国プログラムが実施された。朝早く東京を発ち、北京に降り立つと、青空がひろがりまさに快晴であり、日本よりかは若干肌寒いといったところだが、非常に過ごしやすい天候だった。今年度の参加者は、学生が1名（文責者）、引率の先生方が6名の計7名であった。1日目、2日目は史跡、記念館、博物館をまわり、3日目、4日目は中国社会科学院の方々との国際学術交流シンポジウムが行われ、最終日である5日目は故宮、中国国家図書館を訪れた。実際に史跡を訪れ、その壮大さと絢爛さに目を奪われ、また、国際交流においては、いかに“アジアにおける日本”という視点が重要であるかを改めて実感した素晴らしい体験であった。詳細を、順に追って述べていく。

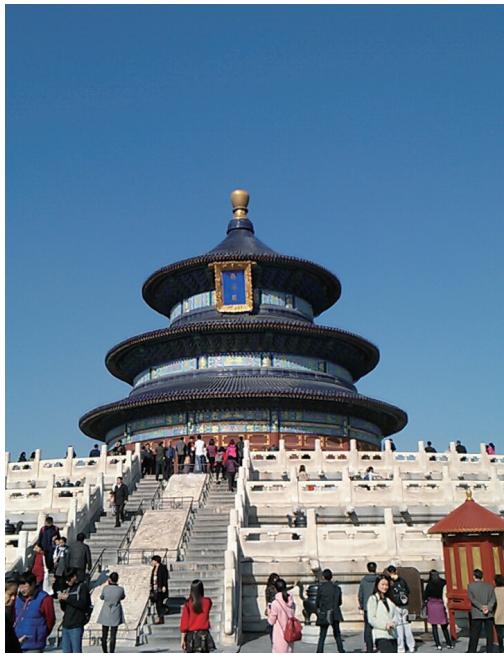
本年度は、北京市内の史跡や記念館を巡るというわけで、1日目は、郭沫若記念館と清朝後期の王府である恭王府を見学した。郭沫若氏（1892－1978）は、中国を代表する歴史家、政治家、文学者である。日本へも留学したことがあり、特に理数系科目の成績がよかったようで、九州帝国大学医学部を卒業した。一方で、歴史や文学、政治活動にも盛んであった。1920年代末に、蒋介石に追われ、日本に亡命したものの、戦後は中国に戻り、政治活動に積極的に参画しつつ、世に多くの研究を発表したのである。例をあげると、甲骨文字研究の第一人者でもある。5日に訪れた国家図書館では、その日、偶然にも甲骨文字の特別展示会が行われており、やはり、氏が取りあげられていた。余談ではあるが、氏の日本亡命先は、千葉県市川市須和田であった。今でも「市川市郭沫若記念館」として、氏の旧宅が復元・整備され、残っている。下総国分寺に非常に近い立地で、また、須和田といえば、明治大学に縁の深い考古学者である杉原莊介氏（1913－1983）のフィールドワーク先としても知られている。引率者のうち、吉村

博士前期課程1年 里館翔大

武彦先生、石川日出志先生は、現在の市川市史編さん委員ということもあり、郭沫若氏の亡命先は明治大学と深いかかわりがあり、自然と氏との縁を感じるところである。

2日目は、国家博物館と天壇を訪れた。国家博物館は地下1階から4階まであり、その資料の多さと規模にはただただ驚かされた。1日でもまわりきれるかわからない規模であり、私個人は、1時間で原始～唐朝まで見学するのがやっとであった。その後、天壇を訪れた。「壇」は「皇帝の祈祷場」を意味し、北京には日壇、月壇、地壇などがあるが、その中でも、「天命」を受けた「天子」が「天」を祀った天壇は最も重要な壇であった。明朝の永楽帝が築き、清朝の乾隆帝が整備した天壇には、青（天の色）・黄（皇帝の色）・緑（庶民の色）が使われており、また、南側を向いている。南側に向かって直線の石畳は皇帝の

歩く道であり、ほかよりも大きな石が設置されている。この皇帝の道は、5日目の故宮にも同様にみられた。漢民族の儀礼は、南側を重視して行われたことが所以のようだ。



3日目、4日目に、中国社会科学院の方々との国際学術シンポジウムが社会科学院にて行われた。平日で仕事が行われはじめ、また、暖房として石炭を焚きはじめたこともあり、この頃からだんだんと空が煙たくなってきた。学術交流においては、学生が日中あわせて、やはり私1人だけということもあって、やや緊張したが、多くの方々の研究に触れ、かなりの刺激を得た。5回目の国際交流会ということもあってか、研究分野や時代が異なるといえど、どの発表も議論が活発であった。また、戦後70年という節目のため、特に15年戦争期の日本と中国の関係性に関する議論は長時間に及んだ。

明治側は、引率の先生方は全員発表されたが、古代から現代まで、日本とアジア、特に今回は中国との関係はどうだったのかを軸にして交流会が行われた。日本の歴史を考える際は、アジアの中の日本という視点から考えることが重要だと常々助言をいただきてきたが、今回ほど、その視点の重要性を実感したことはなかった。古代の日本は、都城や律令といった、国家に重要なシステムを中国から取り入れたのだが、なぜ取り入れたのか。また、律令の、特に令に関しては中国令を踏襲したものもあるが、改変して日本独自の規定を盛り込んだ令文もみられる。つまり、当時の日本と中国とで、どのような社会的、経済的な異同があったのかを探る必要性があると改めて考えた。



最終日は、故宮と国家図書館に訪れた。故宮は、その広さに圧倒された。特に、玉座から南の太和門までの南庭を一望できるが、当時はここに官人たちを集めたのかと思うと、空間的な広さをも支配した皇帝の権力の高さがうかがえる。故宮の中には、多くの殿舎があり、科挙を行うところ、皇帝が着替えるところ、皇后が着替えるところなど用途は様々であった。また、故宮自体が四方を河で囲まれているのだが、ベトナムでも同じような構造の建物があるらしく、アジア圏の関係性が見てとれる。故宮のあとは、国家図書館に訪れた。先にも書いたが、ちょうど甲骨文字の特別展示が行われており、それまでの研究文献や実際の資料が展示されており、また漢字の成り立ちを迫力のある大画面で解説するなど注目度が高かった。文献史料としては、敦煌文書などが展示されており、個人的に「開元格」の断簡を見られたのはうれしかった。

今回のプログラムを通して、いかに日本の古代史を研究するにあたって、中国、ひいてはアジア的な観点が必要かを痛感した。令でいえば、近年、天聖令が発見されたことで、さらに日本の令研究が進展している。古代戸籍でいえば、日本の古代戸籍の研究は一通りなされているが、中国や朝鮮半島などアジアの戸籍との関係性はあまり取りあげられていない。もっと広い観点での研究が必要とされてくるだろう。そういった観点の必要性を痛感できた点で、今回のプログラム参加は非常に有意義なものにできた。

最後に、今回は学生が私1人だけということで、6名の先生方には非常にお世話になり、常に目をかけていただいた。先生方への謝辞をもって、この参加記を終わりとしたい。ありがとうございました。

◆フィールドワーク ◇南西日本プログラム

実施日：2015年12月15日（火）～12月19日（土）4泊5日

参加人数：学生6名、引率教員3名、合計9名

実施場所：熊本・佐賀・福岡

<南西日本プログラム・フィールド調査日程概要>

12/15 羽田空港を出発、福岡空港到着。

基肄城跡・高良山神籠石・女山神籠石を見学

12/16 宇土市立図書館郷土資料館・向野田古墳・御領貝塚・野津古墳群・大野窟古墳・田原坂西南戦争遺跡群を見学

12/17 江田船山古墳・塚坊主古墳・装飾古墳館・チブサン古墳・山鹿市立博物館・鞠智城跡を見学

12/18 佐賀県立博物館・佐賀城跡・銚子塚古墳・西隈古墳・吉野ヶ里遺跡・鳥栖市安永田遺跡・九州歴史資料館を見学

12/19 怡土城跡・伊都国博物館・三雲南小路遺跡・平原遺跡・元寇防塁・福岡市博物館・福岡市埋蔵文化財センターを見学。
福岡空港を出発、羽田空港到着



◇参加記

博士前期課程1年 久米美夏

本年度の南西日本プログラムは、九州島北半部の弥生～古代（近代）の遺跡・博物館の現地見学および調査を目的とし、福岡・熊本・佐賀の3県を5日かけて巡った。私事だが、九州に上陸するのは今回が初めてである。東日本の遺物を扱うことが多い中、知識でしか知り得なかった九州独特の土器や古墳、自然環境に触れ、視野の広がりを実感できた大変有意義な5日間であった。今回訪れた場所は、吉野ヶ里遺跡などの著名な弥生遺跡、鉄剣を出土した江田船山古墳や石室内に装飾を施した古墳、7世紀に成立した古代山城、近代の遺跡である田原坂西南戦争遺跡群といった諸遺跡と、九州歴史資料館、福岡市立博物館といった、北九州における考古・歴史学的観点に於いて、欠かすことの出来ない遺跡や博物館ばかりである。どれも大変興味深く、感想や発見は枚挙に暇がない。その中でも特に印象深く、考えさせられることの多かった場所について綴ることとする。

北九州に来て初めて、古代山城と呼ばれる遺構に触れた。古代山城は、7世紀半ばに大和朝廷が唐や新羅から日本を防衛するために西日本に築いた城の総称であり、『日本書紀』や『続日本記』などの歴史書に記載のある城のことを「朝鮮式山城」、記載のない城を「神籠石式山城」と呼称する。今回訪れた福岡県の基肄城跡や女山神籠石は、石積みの残存状況が良好であり、石材をどのように切り出して積み上げたかがよく分かる事例が多く、当時の技術力の高さが伺えた。中でも、史跡として大々的に整備され、昨年9月に明治大学でシンポジウムも開かれた熊本県・鞠智城の見学は、古代山城の機能を確認する上で非常に為に

なった。ここは、7世紀末に自然の尾根状地形を利用して築かれた巨大な朝鮮式山城であり、銅造の菩薩像が出土した他、日本の古代山城で唯一八角形の建物が検出されている。兵舎や貯水池などが併設されており、10世紀まで存続した一大拠点であったことが、調査の結果判明した。こうした遺跡を見ていると、当時の大和朝廷が唐や新羅といった諸外国に対して如何に注意を向けていたかが、ひしひしと伝わってくる。古代山城成立の背景を理解するには、当時の対外折衝について文献資料などを通して十分に把握する必要がある。考古資料と文献資料の一方を欠いては、十分な検討は望めないことを強く感じた。

唐突だが、私の専攻は考古学である。今回、考古学という点で非常に驚かされたのが田原坂西南戦争遺跡群における発掘風景であった。田原坂は、西南戦争の折、新政府軍と薩摩軍が激戦を繰り広げた古戦場として有名であり、その激しさは、両軍が撃ちあつた銃弾が空中で衝突し、1つに融け合った鉛弾が物語っている。此処では今なお発掘が続けられており、資料館では、その成果が再現映像や



ジオラマを巧みに使い克明に紹介されていた。展示は非常に刺激的であったが、それ以上に驚いたのは、同じく戦場となった神社で行われていた、“穴を掘らない発掘”である。というのも、作業員の方々が手にしているのはエンピやジョレンではなく金属探知機。それを、神社をぐるりと取り囲むように密生している木の幹に向けていた。そこで見せて頂いたのは、地上から約3mの高さで木にのめり込んだ鉛弾であった。木の幹ばかりでなく、石製の灯籠や神社の社殿など、至る場所から同じようにして鉛弾が検出されている。その位置を地図に落として両軍の布陣や戦いの様相を検討しているとのことであった。田原坂のような調査を行っている現場は他に見たことがなく、このような発掘の手法があるのかと目から鱗が落ちる思いであった。

考古学における発掘調査は、基本的に穴を掘って遺構の有無や遺物の分布を確認するものであるが、田原坂のような発掘調査は極めて稀であると言えるだろう。対照的に、こうした考古学的調査を念入りに行い、史跡として復元したのが佐賀県・吉野ヶ里遺跡である。老若男女に広く知られた遺跡であるが、調査は1950年代から行われ、弥生全時期から古墳初頭にかけて継続する集落及び墓地が発見された。驚くべきはその規模である。明治大学駿河台キャンパス16個分にも及ぶ広大な敷地内の至る所に、建物や竪穴住居が復元されていた。遺跡が長期間営まれている事例は、東海地方の朝日遺跡が知られている。集落の変化について研究する上で貴重な遺跡であるが、吉野ヶ里遺跡もまた、ムラからクニへの変遷研究において果たした役割は大きい。

これまでに千葉の金鈴塚古墳や群馬の二子山古墳、埼玉のさきたま古墳群など、関東の様々な古墳を見学したが、九州の古墳には目をみはるものがあった。埼玉県・稻荷山古墳と同様の鉄剣が出土した江田船山古墳もさることながら、同敷地内にある塚坊主古墳は鮮やかな装飾古墳の一例としても目を引いた。同日に見学したチブサン古墳も有名な装飾古墳であるが、そこでは石室内の装飾を保存・保護するのが如何に困難であるかを思い知った。というのも、



チブサン古墳の石室は保存に務める職員の方でも年に2回と入ることができないほど厳重に密封されており、温湿度の管理は勿論のこと、内部の装飾をガラス越しに見学するにしても日に2度決められた時間以外には公開しないという徹底ぶりであった。こうした事例を直に見ることで、昨今話題となった高松塚古墳の壁画の問題なども違った視点で見ることができる。適切な知識と処置があって、初めて文化財は守られるのである。

北九州では甕を用いた甕棺墓と呼ばれる墓制が多く見られる。吉野ヶ里遺跡は勿論のこと、伊都国歴史博物館をはじめとする何処の博物館でも甕棺が展示されていたのが印象的であった。展示品は興味深いものが多かったが、特に北九州の土器に目を引かれた。中でも九州歴史資料館の土器展示は、時期ごとに名称や変遷がひと目でわかる構成になっており、あまり九州の土器に親しくない人間の目から見ても非常にわかりやすく展示されていた。

初めての九州ということもあって、見るもの全てが新鮮であった。今まで触れたことのないものに触れ、理解を深めることができた。遺物や遺構は、二次資料として書物を媒体に検討することも可能だろう。だが、自分の目でモノを見る経験に勝るものはない。百聞は一見に如かずと言うが、北九州各地を転々とした5日間が、それを身に染みる程に教えてくれた。

末筆ながら、このような貴重な機会を与えてくださった諸先生方、並びに関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

◆第6回明治大学・高麗大学校国際学術会議

日 時：2015年10月23日（金）～24日（土）

場 所：明治大学

◇文学会場 参加記

博士前期課程1年 上村茉由

2015年10月23日～24日、明治大学駿河台キャンパスグローバルフロントにて、第六回明治大学・高麗大学校国際学術会議「韓日の語学・文学と歴史学の再検討」が開催された。23日は基調講演及び企画主題発表、24日はA組（語学・文学）とB組（歴史学）に分かれて研究発表が行われた。A組では明治大学から6名、高麗大学校から5名、北京日本学研究センターから1名が発表したが、私もそのうちの1人に加わる機会をいただいた。

形式としては、3人1組となり、発表・質疑応答を行うものだったが、私にとってその質疑は意表を突くものであり、同時に己を顧みる良い機会となつた。本学術会議では全体的に古代を研究対象とする人数の割合が少なく、私に質問をしてくださった方々も、異なる時代を専門とされていた。そのため質問内容も基本的なこととなる場合があるが、私はそれらの質問に対して戸惑いながらの回答となつてしまい、自分の基礎知識に対する認識の甘さを痛感した。普段は自分と同じ時代、もしくは隣接している時代を専門とする方々と接することが多いため、私の中で基礎事項は暗黙の了解と化していた。しかし今回、國も時代も文化も異なる方々と交流したことで、現在自分が学び、深めていきたいと思う課題等の土台となる当時の文化の重要性を再認識させられた。

また、今回の学術会議では語学能力の重要性も身に染みて感じられた。通訳は質疑応答のみだったため、発表自体はそれぞれ日本語・韓国語で行われ、韓国語に触れたことのない私は理解することができなかつた。今後国際的な交流が増していくだろうことを考えると、自分の考えを相手に正確に伝達するための語学力の向上にも努めるべきだと実感した。

以上、この度の学術会議では多くの気づきを得られ、とても貴重な経験ができた。今後も両大学の交流を深め、国や時代の壁を越えて研究が発展していくことを願い、参加記を終わりたい。

◇史学会場 参加記

博士後期課程3年 坂口彩夏

本学術会議の特徴は、国・地域だけでなく、対象とする時代幅が広いことにある。日ごろ、精度の高い研究が求められ、狭く・深く考えることに捉われていたため、視野を広げる良い機会となつた。2日目（10月24日）は文学・歴史学に分かれ、院生を中心に報告をおこなつた。

討論では、高麗大学校の学生とペアになり、報告者同士で質問し合うことになっている。そのため、事前に基礎的な事項や質問内容を確認することによって、交流するきっかけとなつた。言葉の壁を越えて質問するには勇気が必要だが、それを後押ししてくれるルールといえる。報告者として初めて参加したからこそ、気づいた点である。

また、同じ大学であっても専攻する時代が離れていると、互いの報告をきいたり、話したりすることは多くない。近現代史の院生とも親交することができ、うれしく思う。

私は、「皇位継承儀礼による称制の検討」（日本古代史）というタイトルで報告させていただいた。日本における称制は2例しかなく、そのうち1例は白村江の敗戦前後におこなわれた天智天皇による即位前の天皇代理執政である。つまり、唐・新羅・百濟との対外関係が天皇の即位、それにともなう儀礼（先帝の葬送儀礼・新帝の即位儀礼）に影響を与えていたと考えられる。この点に関する研究課題は多いが、今回は日本という枠にとどまらないことの重要性を再認識した。朝鮮史の報告を聞くことによって、陸続きである分、中国との関係を常に留意している姿勢は見習わなければならぬと痛感したのである。

各時代や専門分野における通説的見解など、自らが詳細に検討していなくても、当然のことのように享受している学説が少なからずあるだろう。それが共有されていない状態で報告・討論をおこなうことが新鮮であった。

末尾となるが、関係者の方々に御礼を申し上げたい。



◆国際学術研究会 「交響する古代VI－古代文化資源の国際化とその意義」

日 時：2016年1月20日（水）～21日（木）

場 所：明治大学

◇参加記

博士後期課程1年 千葉仁美

二〇一五年度「交響する古代VI」は、二〇一六年一月二十日、二十一日の二日間に亘って行われた。二十日には大学院生の報告部会、基調講演、諸先生方による発表の第一部が行われ、続く二十一日には第二部が行われた。大学院生・諸先生方の発表には、学内外・国内外の研究者が集まり、例年に劣らず国際色豊かなプログラムであった。

わたしは第一日の大学院生の報告部会に参加し、「渋江抽斎『覆宋本文選跋』について—袁麿刊本「六家文選」摺刷の前後—」と題して報告を行った。渋江抽斎は、幕末の書誌学者で、日本で最初の本格的漢籍書誌目録である『經籍訪古志』の編者の人でもある。その抽斎が著した『覆宋本文選跋』は、「六家文選」刊本のなかでも精善なることが知られる明版・袁麿刊本の各巻末跋を抜き書きしたものである。『經籍訪古志』に記された袁麿刊本「六家文選」の記述と『覆宋本文選跋』を比較する事によって、『覆宋本文選跋』の底本となった刊本が、狩谷棟斎旧蔵の一本であり、『經籍訪古志』に記述されるまさにその本であることが判明した。また、袁麿刊本「六家文選」の各巻末跋文は、その有無を検めれば、刷りの前後が判断できる。『覆宋本文選跋』と、日本に現存する袁麿刊本諸本を比較することによって、諸本の摺刷の前後関係が明らかにできることを示した。以上が報告の主旨だが、東アジア共通の教養である「文選」が、日本に渡り近世に至って、どのような書誌学的態度で受け容れられたかを考えることもできよう。今回の研究会に御参加下さった先生方には、短い報告ながら、中核に迫る御質問や御指摘、御助言を頂き、今後、この研究を進めてゆく上で目指すべき指針が増えた。研究分野や時代、対象に捉われず多彩な方々の一時に会した場であったことが、報告者のわたしにとって幸いである。

今回の研究会では、全体テーマを「古代文化資源の国際化とその意義」と題して、十一名の先生方が発表された。一日半に亘る発表は多彩かつ多様であった。私見ながら大きく纏めると、内容は、東アジアにおける古代文学、欧米諸国における文化資源と日本に二分されると考える。前者では、韓国・中国・日本における文学の諸相とその連関が意識され、後者では、日本の文化・文化財の欧米諸国での受容と活用の現状が報告された。御報告のひとつひとつを紹介する



に紙幅を割くことができないが、東アジアに共有される文学の世界と、現代に共有される東アジア古代文物の世界とが、それぞれに示された二日間であった。研究対象としては前者の御報告が近いものの、後者の発表も興味深く、前者を現代の問題として捉えなおす新しい視点を発見したともいえる。これら二つの内容が、ひとつの研究会として成立するテーマを持ちながら、場を同じくして報告が行われるという点が、本研究会の魅力のひとつであろう。

なお、今回の研究会、並びに報告の機会の場を設けてくださった方々に、この場を借りて御礼を申し上げ、結びとさせて頂く。



◆研究紹介

－平成 28 年度 独立行政法人日本学術振興会 特別研究員に採用されました－

研究題目『中世における今様受容に関する多角的研究』

博士前期課程 2 年 須藤あゆ美 さん

今様とは、平安後期から院政期にかけて都で大流行した歌謡である。生涯今様を愛し続けた後白河院は、『梁塵秘抄』の編纂という形で数多くの今様を世に遺した。今様を研究することは、文学という領域に留まらない。今様研究は、歴史的風俗や人々の信仰などといった精神面を捉えることでもあり、さらに歌謡であり芸能でもあるというその特質から、日本史学・宗教史学・歌謡史学・音楽史学・芸能史学とも切り離せない。古代から中世への変革期に流行した今様を研究することはあらゆる分野に跨がるといえ、研究意義は非常に大きい。



従来の今様研究では、今様は後白河院時代をピークに、それ以降衰退したと言われてきた。しかし今様は、『平家物語』を始めとした文学作品に描かれることで生き続け、精彩を発揮している。そこで本研究は、歌われた「場」を離れ、中世文学作品に受容されることで生命力を持ち続けた今様に着目し、寺院関係資料・日本史史料・音楽伝承資料などさまざまな資・史料を駆使しつつ、文学作品に描かれる意義を考察することを目的とする。

さて、この計画内容には明治大学で養われた経験が根底にある。というのも、明治大学には「複眼的日本古代学研究の人材育成プログラム」が用意され、考古学・日本史学などの他分野から刺激を受ける機会に恵まれているからである。私自身、博士前期課程 1 年生のときに高麗大學校と南カリフォルニア大学での学術交流会に参加し、領域を広げることを、視野を広げることを、学ぶことができた。これらの経験が、文学に留まらない分野の手法を自身の研究に取り入れようと考える端緒となった。本研究が日本学術振興会で採用されたことは、まさに上記のような複眼的研究が求められているということを指し示していよう。

領域を超えた研究者になることを目指す私にとって、「交響する」（シンポジウム「交響する古代」より）ということばは非常に魅力的にうつる。今様も当時のさまざまな文化・信仰・風俗が交響し、文学に受容されることで継承されたひとつの遺産であるからである。領域を超えるためには、あらゆる分野の専門性を身につけ、それらを統合し発信する困難が伴う。しかし、学術的好奇心に促された行動力を以て研究を遂行する覚悟である。交響する古代の一遺産「今様」を明らかにしたい——「多角的」という研究テーマにはこのような情熱が反映されているのである。

◆ 2015 年度プログラム（秋学期）の軌跡

2015/10/23 ~ 24 第 6 回明治大学・高麗大学校国際学術会議

2015/10/26 中国プログラム事前ガイダンス

2015/10/31 ~ 11/4 中国プログラム（4 泊 5 日）

2015/10/30 ニューズレター第 18 号発行

2015/12/9 南西日本プログラム事前ガイダンス

2015/12/15 ~ 19 南西日本プログラム（4 泊 5 日）

2016/1/20 ~ 21 国際学術研究会「交響する古代VI ー古代文化資源の国際化とその意義」開催

2016/3/20 紀要『日本古代学』第 8 号発行

2016/3/25 ニューズレター第 19 号発行

明治大学 〒 101-8301 東京都千代田区神田駿河台 1-1

日本古代学教育・研究センター：猿楽町第二校舎 3 階 TEL・FAX：03-3296-4492

E メール jkodaken@meiji.ac.jp

ホームページ http://www.meiji.ac.jp/dai_in/arts-letters/jkodaken

教務事務部大学院事務室：グローバルフロント 5 階 TEL：03-3296-4143 FAX：03-3296-4352